

## 在任中の思い出

田原真也

神戸赤十字病院・兵庫県災害医療センター

形成外科・創傷治療センター

2007年から2010年の4年間機関誌編集委員長を務めさせていただきました。藤野、玉井、波利井、土井という歴代の名編集委員長がシステムをしっかりと確立しておいていただけだったので、私の役割はその上に乗っかって事務処理を遂行するだけの苦勞の少ないものでした。原稿数も会員各位のご協力で任期期間中漸増の状態推移しました。特に各年の学術集會會長が座長推薦演題を数多く選んでお知らせいただいたのは、論文数確保に大きな力になりました。第34回上田和毅、第35回牧裕、第36回中西秀樹、第37回平田仁、各會長に改めてお礼を申し上げます。任期中の最大の出来事は機関誌が冊子体からオンラインジャーナルに移行したことです。これも出版事務局である春恒社の協力で大きな障害なくスムーズに進んだと記憶しています。ただ最後の詰めの段階の時期に、東日本大震災が発生し、出版事務局も多大の被害が出たと後で伺いました。関西在住の私はそんな苦勞も知らずにオンラインへの移行を無邪気に喜んでおりました。振り返れば赤面の至りです。私の楽観論で進んでしまったオンライン化ですが、それを受け継いだ平田仁新編集委員長には大変なご迷惑をかけたことと反省をしています。新委員長の尽力のお陰で、現在出版業務は極めて順調に推移していると拝察します。ただオンライン化そのものの成否についてはまだ今後の評価に待つところが大きいと思っています。

おおむね平穩に推移した在任期間でしたが、ただひとつ心に残った出来事をご紹介します。投稿論文の査読は著者名、所属施設名を伏せて二人の編集委員に依頼をします。多くの場合、二人の査読者の意見が大きく違うことはなく、指摘された点を著者が修正して、掲載へと進みます。二人の査読者の意見が異なる場合、例えば一方の査読者が「小修正の上掲載可」、もう一方が「大幅な修正で再査読要」といった場合は編集委員長が第3の査読者として、調整を図っていました。内容については著者責任を優先させて、できる限り掲載の方向というのが私の基本姿勢でした。中には両査読者ともに「掲載不可」という場合も稀ですがありました。そんな中、第3査読者の私を大いに困らせる事例がありました。一方の査読者が「このまま掲載可」、もう一方が「掲載不可」というものでした。第3査読者として論文を読みましたが、論文自体はきちんと書かれており指摘すべき修正箇所もない優れたものでした。しかも両査読者の指摘はいずれも誤ってはおらず、正当な意見でした。「このまま掲載可」は問題ないのですが、「掲載不可」の理由は学会誌にふさわしくない、つまり論文の主題がマイクロサージャリーとは関係ない、というものでした。著者、両査読者いずれも誤りはないという行き詰まり状態でした。ここで編集委員長として取りうる選択肢はふたつあります。1. 査読者を説得して掲載とする。2. 著者を説得して他のジャーナルへの投稿を薦める。いずれか一方を選択しなければなりません。私は後者を選びました。委員長として、学会に選ばれた編集委員の意見を尊重したということです。私個人としては1. を選びたいという気持ちがありました。学会としての公の立場を優先させたということになります。

正しかったのか、誤りだったのか、今でも結論はありません。どちらを選んでいたとしても、現在と同じ“悔い”を感じていただろうと思います。